

平成20年度野球殿堂入り表彰式 ～入道雲と甲子園～ 事務局長 佐藤 宏

前号に引き続き表彰式の話です。平成20年度特別表彰の故・嶋 清一さんの表彰式が8月15日、甲子園球場で行われました。嶋さんは旧制和歌山県立海草中学の左腕投手として春2回、夏4回甲子園大会に出場、とくに昭和14年の第25回全国中等学校優勝野球大会では全5試合を被安打8、奪三振57の成績で完封。準決勝、決勝では2試合連続ノーヒットノーランという、大会史上初の偉業を達成し、海草中学を初優勝に導きました。その後、明治大学に進学し、将来を嘱望されましたが、昭和20年3月インドシナ半島沖で戦死、享年24歳でした。

以上のご紹介からも終戦記念日である8月15日の甲子園球場は、嶋さんにとって最もふさわしい舞台であることがお分かりいただけると思います。また、嶋さんの偉業は、平成10年夏の大会優勝の横浜高校の松坂 大輔投手(現・MLBレッドソックス)が決勝戦においてノーヒットノーランを達成したことにより、再び掘り起こされることになったことも付記しておきます。

事前の気象予報はどれも芳しくなく、成り行きが心配でしたが、当日は朝から、かなたに沸き立つ入道雲が遠望できる日和に恵まれました。表彰式は試合開始前に行われましたが、第一試合が大阪桐蔭対報徳学園の地元勢同士の人気カードということもあり、すでにスタンドの8割近くは埋まった状態でした。

表彰式では、海草中学の後身である和歌山県立向陽高校野球部の加森主将に、根來理事長よりレプリカが贈呈されました。また、嶋さんとは海草中学、明治大学そして応召と全く同じ道を歩まれた、かつてのチームメイトの古角 俊郎さんには花束が贈呈されました。古角さんは、4連投で大会優勝を成し遂げた翌日、当時の阪神プールで水泳に興じる嶋さんのスナップ写真を胸ポケットに忍ばせて式典に臨まれました。また、根來理事長は今回が最後の公式行事へのご出席となりました。引き続き、脇村会長にも入っていただき記念写真の撮影を行った後、大きな拍手に送られて、表彰式は無事に終了しました。



表彰式の運営にあたり、ご指導、ご協力を戴いた(財)日本高等学校野球連盟の皆様はじめ関係者の方々に心から御礼申し上げる次第です。

左から
日本高等学校野球連盟・脇村 春夫会長
和歌山県立向陽高校野球部責任教師・
井上 育也先生
同野球部・加森 禎人主将
嶋氏のチームメイト・古角 俊郎氏
野球体育博物館理事長・根來 泰周氏



夏休みイベントのご報告

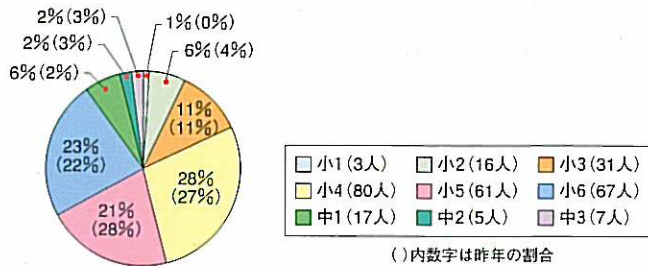
野球で自由研究!

7月19日(土)～8月31日(日)まで館内の図書室で、小・中学生を対象として野球に関する自由研究をサポートする「野球で自由研究!」を行いました。

今回は木製バットの重さや長さを計ったり、ポジションによってウェブの形が違うグラブを触ったり、軟式ボールと硬式ボールを比べたりできるように実物を展示しました。また、野球道具をより知ってもらうため、グラブのできるまでやボールのできるまでなどの情報を提供しました。その他にも、野球の歴史や野球場、野球の用語解説などの資料も提供しました。期間中には多くの方が図書室を訪れ、用具の実物に触れるなどの体験をしました。その中で287人(前年264人)の小・中学生が野球をテーマに自由研究に取り組みました。学年別に見ると、小学4年生と6年生が昨年に比べ10人ずつ増え、4年から6年までの3学年で全体の72%を占めました。中学生は夏休みの自由研究というよりも、年間を通して行う「調べ学習」の資料収集に図書室を利用していました。(※グラフ1)

テーマ別にみると、108人が野球用具について調べ、次いで79人が野球の歴史でした。今年は北京オリンピックが開催された事もあり、オリンピックの野球について調べる子どもも多く、野球日本代表への関心の高さを示していました。(※表1)

※グラフ1 学年別の利用者



※表1 学年別主な自由研究のテーマ

	歴史	用語	野球場	用具	マスコット	オリンピック	その他
小1					2		1
小2	4	1	1	8	2	1	3
小3	12		4	10			11
小4	11	4	11	29		6	20
小5	20	4	7	25	2	3	10
小6	19	5	4	31		4	14
中1	7	1		2			7
中2	1	1		2			1
中3	5			1			1
合計	79	16	27	108	6	14	68

今年は自由研究のために来館し、様々な情報に触れてからテーマを決め、図書室で情報収集していく姿が多く見られました。来年も小・中学生のみなさんが野球により一層興味を持ってもらえるような自由研究のテーマを提供し、一緒に楽しく調べたり考えたりしていきたいと思ひます。

バット製作実演

当館では2002年より毎年、ミズノ株式会社様のご協力により、夏休みイベントを実施しています。今年は、8月19日(火)、20日(水)に、ミズノテクニクス 渡邊 孝博クラフトマンによる「バット製作実演」を野球殿堂ホールで行いました。

今年も開催情報をあらかじめ調べてご来館されたお客様が多数見られ、家族で熱心にメモを取り、写真を撮影していました。渡邊クラフトマンは、自由研究目的の小学生にも分かりやすい説明で、質問にも丁寧に対応してくださいました。また、各回4人ほどの小学生にはやすりがけ体験も行っていました。

今後も特に野球ファンになりたての小学生や、これから野球を始めようとしている小学生に、さらに興味を持っていただき、さらに野球を好きになってもらえるようなイベントを実施したいと考えています。

夏休み親子グラブ製作教室

また、8月21日(木)には「夏休み親子グラブ製作教室」を開催しました。

7月中旬に当館ホームページで参加者を募集、135通の応募の中から抽選で選ばれた10組20名の親子が参加しました。

ミズノのスタッフ6名の方々の指導の下、各組とも約2時間でグラブを完成させ、「自分で作ったグラブ」をお持ち帰りいただきました。





殿堂入りの人々を語る (21)

小泉 妙 (小泉 信三氏 次女)



1976年野球殿堂入り
小泉 信三氏レリーフ

映画「ラストゲーム」(最後の早慶戦)は辛い時代の悲しい話ではありますが、見終わって涙をふくと、清々しい気持ちになりました。

当時、野球に対する弾圧は厳しく、六大学野球リーグ戦は禁止されていましたが、慶應では、せめて学徒出陣の前の学生たちに、早慶戦をさせたいという意見が出ました。当時塾長であった私の父(小泉 信三)は早速早稲田に諮りましたが賛成されず、文部省、軍関係に交渉を重ね、実現に漕ぎつけたのでした。父が没後10年の1976(昭和51)年に野球殿堂に入れていただいたのも、その事を認められたからでございましょう。

野球殿堂には慶應義塾出身者が22名、多くが父の親しい方々ですが、9年先輩の平沼 亮三氏を父は「日本のスポーツ界の恩人」と敬服しつつ、楽しいお付き合いを重ねておりました。「ラストゲーム」の小泉 信三役は石坂 浩二さんですが、石坂さんの外祖父が平沼さんであるのも、人の縁の面白さと思います。石坂さん自身も慶應出身であり、平沼さんのお血筋ですから、お祖父様と父に共通の気分(慶應気質とも言える)をよく理解されての自然な演技と感じました。

父は中学時代テニスに熱中し、中学生でありながら慶應義塾全体の選手として、大学の対校戦に活躍致しました。戦災で重傷を負わなければ、晩年までプレーを続けられたでしょう。火傷のためにラケットが握れなくなったのは実に気の毒でした。しかし元来キャッチボールの好きだった父は、体力が快復するとキャッチボールを始めました。三田のイタリア大使館に近い家の門前で、その頃同居していた青年を相手に投げ合うのでした。見物に来た近所の子供たちから「おじさんカーブをつけてみなよ」とか、「もっと足を上げると巨人の川崎に似るよ」などと言われると、その言葉通りに試してみたりして喜ばせました。

晩年に住んだ麻布広尾では、塀が相手でした。勉強の合間などに気を替えたくなるのでしょうか。玄関の靴の棚に入れてあるグローブとテニスボールを持って道へ出て行きました。

現在、六大学野球リーグ戦の始球式はどなたがなさるのでしょいか。父が塾長に就任した1933(昭和8)年から野球禁止の時代までの約9年間、始球式は文部大臣か各大学総長のお役でした。当然父にも番が廻って来ると思われますのに、なぜか待ちぼうけでした。テレビのないその頃、たまにニュース映画で始球式を見ましたが、感心することはなかったのです。

父にさせたいという家族の願いが絶えて久しい1964(昭和39)年、全日本大学野球選手権大会の始球式をたのまれました。練習の成果はしかし発揮されなかったのです。父は球が捕手に届かず、バウンドすることを恐れて高目に投げ、それが捕手の頭を越す暴投になってしまいました。「暴投でも76歳であれだけ投げられるとは」、ほめて下さる方はそう言われました。家族は不満でした。年の割にはなく、本当にストライクを投げられる腕前なのですから。残念に違いないのに父は「まあ、あんなものさ」と申しました。



1965(昭和40)年 小泉 信三氏春季
リーグ戦始球式のボール 東京六
大学各校主将のサイン入り

(左) 慶應義塾 江藤 省三主将
(右) 早稲田大学 大塚 弥寿男主将

翌1965(昭和40)年春、今度は六大学リーグ戦の始球式をつとめました。しかも前年秋の優勝校慶應と東大の第1戦です。私は心配について参りました。時が来て、父がマウンドに向かって歩き出すと、ステッキをつく歩みの遅さに、観衆から「遅いな」の声、「キャッチャー前に入る」と叫ぶ人もいます。私は目をつぶりそうになりました。一瞬の静寂の中に「ストライク」と審判の高い声、大拍手、あの感激は忘れられません。

投球の写真は今も私の居間に飾ってあります。父の背後に立つ副審の姿勢は、父に抱きつかんばかりです。「先生が転びそうになったら抱えろ」とある方が指図されたとか。

父の死は、長年の望みの見事にかなったその翌年5月でございました。

知^{もの}ってほしいこんな資料(64)

「イチロー選手と、キーラー選手、張本選手のバット」



当博物館では現在、企画展「名選手のバット展」を開催中です。同展は数年ごとに開催する人気の企画展で、今回は往年の名選手から現役選手まで56本のバットを一堂に展示し、その長さ、重さ、直径等の情報も併せてご紹介しています。

その中で、今回特にご紹介したいのが写真の、2008年シーズンにMLBタイ記録8年連続200本安打を記録したイチロー選手のバット（写真の手前）、その記録を107年前に打ち立てたウィリー・キーラー選手のバット（写真の中）、そして日本プロ野球通算最多安打記録3085本を打ち立て、イチロー選手が日米通算であと2本と迫っている、張本 勲選手の3000本安打達成のバット（写真の奥）の3本です。

イチロー選手のバットは2007年にメーカーのミズノ株式会社からご寄贈いただいたものです。イチロー選手はデビュー当初からほとんど同じ形状で、アオダモ材のバットを使用しているとのことですが、NPBでは透明な塗装、MLBに行ってから黒い塗装のバットを使っています。95年のオリックス時代の白木のバット、2006年の第1回ワールドベースボールクラシックの際に使用された黒いバットも今回展示していますので、見比べてみるができます。

キーラー選手のバットは、49年前の当館開館時に、記念としてアメリカの野球殿堂博物館から寄贈されたものの中のひとつです。19世紀から20世紀にかけて活躍し、1939年米国野球殿堂入りの名選手で、そのバットが77.5cmと極端に短いという特徴があることから、当館ではほぼ常設で展示してきました。今回、イチロー選手の快挙により、広くキーラー選手の名前が紹介されましたが、当館開館時にアメリカからやってきたバットが、半世紀を経て当時の方たちには想像もできなかったような形で脚光をあびていることに、不思議な縁を感じます。また、張本 勲選手の3000本安打達成のバットは、1980年5月28日、ロッテ対阪急戦（川崎球場）での記録達成のあと、7月6日の川崎球場での表彰式の際、張本氏ご本人からご寄贈されました。張本選手が連盟や40社から記念の品を贈呈される中、最後に当時の大野館長が張本選手からバットを受け取ってきたと、笑って語っていたとのこと。

イチロー選手の大活躍が、MLBの107年前の大記録と、NPB最多の3085安打という大記録に再び光をあてています。この3本を一堂に見る機会はなかなかないと思いますので、ぜひ足を運んでいただければと思います。また、この3本のバットの他にも、NPB最多本塁打ベスト3の王 貞治、野村 克也、門田 博光各選手のバットや、福本 豊選手のツチノコ型バットなど、たくさんの個性的なバットを展示しています。ぜひご覧ください。

学芸員 関口 貴広

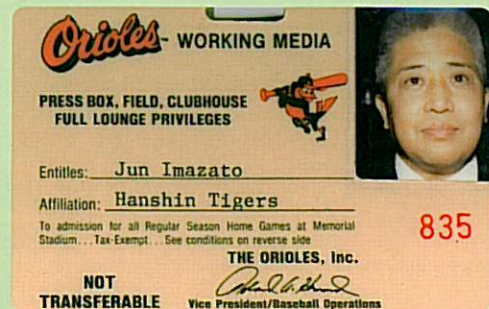


コラム／博覧・博楽 (28)

真の大リーグ通と呼ばれた歯科医の話 (2)

今里 聡 (今里 純氏 長男)

前号に記載したような経緯で、米国のコミッショナーから「日本随一の大リーグ愛好家」のお墨付きをもらった私の父（今里 純、兵庫県西脇市開業の歯科医）のもとには、アメリカン・ナショナル各リーグの選手名簿、ルールブックや全球場のフリーパスなど、毎シーズンさまざまな資料が届けられた。また、各球団からも、帽子やユニフォーム、広報誌、選手のサイン入りボールやバットといったものが送られてきたが、中にはいくつかのテキストブックもあった。「ロサンゼルス・ドジャース野球教本」「ボストン・レッドソックスのコーチに与える書」「テッド・ウィリアムスの打撃論」「タイ・カップの外野守備」といった具合である。そのような資料は、1950-60年代当時の日本ではなかなか手に入らない貴重なものであったことから、父はそれらを翻訳して小冊子にし、吉田 義男氏（元阪神タイガース監督）を始めとする親しい日本の選手に提供した。やがて、人伝てにその話を聞いた選手が父にコンタクトするようになり、日本のプロ野球選手との交流も広がっていった。吉田氏をはじめ、山内 一弘氏、村山 実氏、鈴木 啓示氏など、我が家には有名選手がよく訪ねて来られたものである。晩年、それらの翻訳資料を編集し、「野球学」と題する約500ページからなる米国野球参考書を過去40年間の集大成として脱稿し、阪神タイガースより出版していただいた。



ボルティモア・オリオールズの球場年間フリーパス

こういった大リーグとの強力なコネクションは、現役引退後に米国に視察に行く元選手の方々にも役に立ったようで、紹介状を書いたり、各球団の広報部長に手紙を出して取材に必要なクレデンシャル（信用証明書）を取りつけたこともしばしばであったらしい。比較的最近では、現北海道日本ハムファイターズ監督である梨田 昌孝氏も、父の門を叩いたお一人だったと記憶している。また、日本の球団の中ではとくに阪神タイガースとの親交が深かったことから、球団側からの依頼を受けて1989年から1990年にかけて3回渡米し、米国のデトロイトタイガースとの姉妹球団提携に一役買った。米国の球場で提携のセレモニーを執り行った時のことをうれしそうに話していたのが印象的である。

父はあくまでも素人であったが、野球英語に精通していたことでは、恐らく右に出る者がいなかったのではないと思う。晩年、米国野球の歴史（小史）の編纂を行うとともに、米国野球協約の全巻を翻訳し、従来原語で読んでいたため解釈の誤りが多かったそれらの資料を日本語で読めるようにしたことも父が残した功績のひとつである。



阪神タイガース選手時代の吉田 義男氏（右）、山内 一弘氏（左）と父（中央）

1970年代に野球雑誌から取材を受けた際、父は、「日本の選手がスカウトされて大リーグで活躍する姿を見るのが夢」と語っている。今やそれは現実のこととなり、日本人選手の活躍が連日メディアを賑わしている。父も空の上で目を細めていることだろう。何か自慢話ばかりになってしまったようで申し訳ないが、一歯科医であった父が、日本から大リーグへのルート開拓に尽力したことを誇りに思うとともに、他界した今も「真の大リーグ通」と呼んでいただけることにただ感謝の念でいっぱいである。



こんにちは図書室です



大阪発行の野球雑誌「ベースボールニュース」

図書室にあるほとんどの出版物は、東京で発行されたものが多いのですが、わずかに地方で出版されたものも所蔵しており、東京ではなかなか得られない情報を見ることができます。中でも、私たちが調べものによく使っている「ベースボールニュース」を、ご紹介します。



ベースボールニュース
第139号（1935年11月17日発行）

「ベースボールニュース」の創刊は1932年3月で、発行所は大阪市北区新川崎町の大阪実業青年野球親交会（創刊号と2号。3号からベースボールニュース社となる）です。発行は毎月3回（1日・10日・20日）で、大きさはタテ約38cm・ヨコ約26.5cmのタブロイド版といわれるサイズです。発刊の辞には「これまで凡ゆる運動機関紙のたどっている人気ある一方的部分（例えば六大学リーグを殆ど専門的のように）のみに偏せず、北海道から内地一帯、満洲、朝鮮、台湾と全日本に渡って総てのベースボールマンの活躍、動静を遺憾なく一括掲載して広くファンの興味と参考に供するのが本紙の生命でございます。」とあります。

巨人軍の千葉 茂さんがこの雑誌のことを「ピンクのあれがあればわかるのに」とおっしゃっていましたが、当時は当館で所蔵していなかったため、ピンク色の雑誌がどのようなものかわかりませんでした。その後50部ほど購入することができ、千葉さんがおっしゃっていた“ピンク色”を確認することができました。また、内容を見ても試合結果が詳しく出ているので、千葉さんは「あれならわかる」とおっしゃったのだと思います。

例えば、1933年1月22日に行われた京都四中等学校選抜リーグ戦の京都商業対京都一商のことを「京商野球部史」では「…この試合守りがよく打線もタイムリーに安打が出て、3対0とシャットアウトで快勝。」とありますが、第23号（1933年2月1日発行）のボックススコアを見ると、京都商業のピッチャーは沢村投手1人、京都一商の打撃成績は打数22、安打0、犠打0、三振6、四死7、盗塁2、失策2でしたので、ノーヒット・ノーランを達成した試合だったことがわかります。

ベースボールニュースは中部・近畿地方の記事がやはり多いのですが、全国の野球試合を網羅しているのではと思うほど、地方の試合結果が載っています。「野球界」や「運動界」の雑誌で調べても出ていなかった試合結果が、「ベースボールニュース」で見つかったことは何度もあります。まさしく「…北海道から内地一帯、満洲、朝鮮、台湾と全日本に渡って総てのベースボールマンの活躍、動静を遺憾なく一括掲載して広くファンの興味と参考に供する…」のと通りの雑誌だと思います。

当館で所蔵している「ベースボールニュース」は、欠号もありますが1932年（1号）～1937年2月（200号）までです。現在、図書室の入り口付近に複製を何冊か並べていますので、今まで何を見ても結果が出ていない試合などありましたら、ぜひ見にいらして下さい。

司書 小川 晶子



▶▶<<2008年度の維持会員を募集中!>>

財団法人野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万冊を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

1. 会員の特典

- (1)当博物館発行「ニュースレター」(季刊) 送付します。
 - (2)無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
 - (3)アメリカの野球博物館(クーパースタウンにある)にも無料で入館できます。
 - (4)会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
 - (5)イベント情報などを優先的にご案内します。
 - (6)博物館で販売している商品が10%引きになります。
- *新個人会員には上記の特典のほか、「野球殿堂 2007」を贈呈します。
*新ジュニア会員には上記の特典のほか、「野球体育博物館オリジナルピンバッジ」を差し上げます。

2. 会員の種類と会費

年会費(4月~翌年3月迄)

法人会員 1口 10万円 個人会員 1口 1万円
ジュニア会員(小・中学生) 2,000円

ご入会月により、初年度会費の割引があります。

ご入会月	4月~9月	10月~12月	1月~3月
維持会費 (個人会員)	10,000円	5,000円	2,000円

3. ご入会の方法

- ①館内にあります「維持会員募集のご案内」の“入会申込書”に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。
「維持会員募集のご案内」は郵送もいたしますので、ご希望の方は博物館までご連絡ください。
- ②“入会申込書”が届き次第「維持会費のご請求書」をお送りしますので、維持会費をお振込みください。

お問い合わせ 博物館 業務部 ^{たかぎ}高城・竹内
皆様のご協力、よろしくお願い申し上げます。

博物館からのお知らせ

【役員・評議員の交代】

10月2日の任期満了に伴い、理事10名・評議員30名の方には再任を、また次の理事3名・監事2名・評議員4名の方には、新たにご就任いただきました。今後ともよろしくお願いいたします。

新任 理事長 加藤 良三氏(プロ野球コミッショナー)
理事 坂井 信也氏(株阪神タイガースオーナー)
久代 信次氏(株東京ドーム代表取締役副社長)
監事 神田 俊甫氏(読売新聞東京本社取締役事業局長)
北田 英壹氏(株東京ドーム取締役常務執行役員)
評議員 加藤 良三氏(プロ野球コミッショナー)
沼沢 正二氏(株阪神タイガース常務取締役)
村山 良雄氏(オリックス野球クラブ(株)常務取締役)
森 正博氏(財日本体育協会常務理事)

【訃報】

1981年殿堂入りの岩本 義行氏が9月26日に逝去されました。(享年96歳)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

【ありがとう広島市民球場! ベースボールフェスタ】開催】

広島東洋カープの本拠地である広島市民球場が、ラストイヤーを迎えます。

その記念事業として、カープの往年の名選手が一堂に会し、紅白戦を行うなどの「ありがとう広島市民球場! ベースボールフェスタ」が開催されます。

日時 2008年12月6日(土) 9時~16時(予定)

場所 広島市民球場

内容 スタジアムツアー、写真パネルやユニホームの展示、カープOBオールスターゲームなど

詳しくは広島市のホームページから次のように進み、広島市民球場のページをご覧ください。

広島市ホーム>施設ガイド>スポーツ施設>広島市民球場

●編集後記

今、博物館では2009年殿堂入りが決まる表彰委員会の準備を進めています。来年1月13日(火)午後3時から野球殿堂入りの記者発表が当館野球殿堂室で行われます。ご来館の方々もそのようすをご覧になれますので、ぜひお越しください。

【創刊50周年記念「週刊ベースボール」の特別資料展が開催】



週刊ベースボール
創刊号表紙

1989年に野球殿堂入りした池田 恒雄氏(特別表彰)が創刊した野球専門週刊誌「週刊ベースボール」(ベースボール・マガジン社発行)が、58年の創刊以来、50周年を迎えたことを記念して、池田記念美術館(新潟県南魚沼市)で、「週刊ベースボール 野球ファンの記憶に刻んだ半世紀」と題した企画展が現在、開催されています。パネル展示のほか、同誌のバックナンバーを閲覧できるコーナーも設置しています。

期間 11月17日(月)までの9:00~17:00(最終日は15:00まで)
毎週水曜日休館
入場料 大人 500円、高校生以下無料
記念誌付チケット 大人 1000円、高校生以下 500円
場所 JR上越新幹線「浦佐駅」から徒歩15分
詳細は、同美術館のHPをご覧ください。

<http://www1.ocn.ne.jp/~ikedaart/>

博物館のご案内

場所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日~9月30日 AM10時~PM6時
10月1日~2月末日 AM10時~PM5時
(入館は閉館の30分前まで)

入館料 大人 500円(300円) ()は
小・中学生 200円(150円) 20名以上の団体
65歳以上 300円

休館日 月曜日(祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)
年末年始(12月29日~1月1日)

【11月・12月・1月の休館日】

11月 10日・17日

12月 1日・8日・15日・22日・29日・30日・31日

1月 1日・19日・26日

*2009年2月2日~9日は館内改装のため臨時休館となります。

Newsletter Vol.18 / No.3

2008年10月25日発行

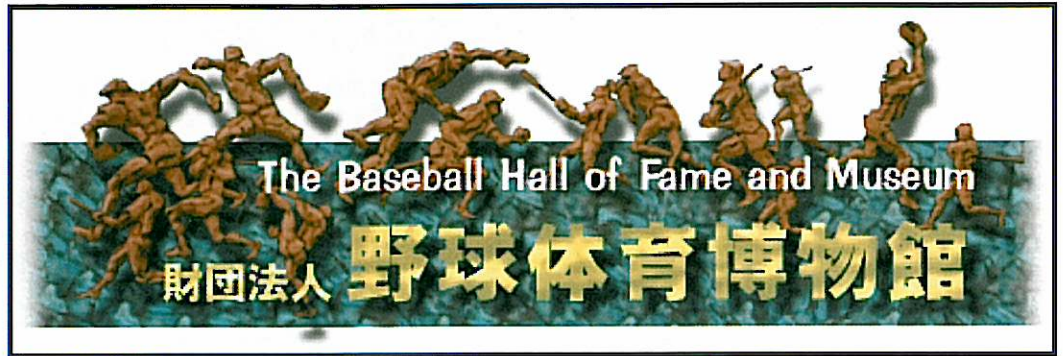
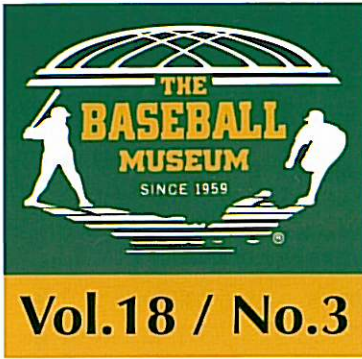
編集・発行 財団法人 野球体育博物館

〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

Tel 03 (3811) 3600 Fax 03 (3811) 5369

<http://www.baseball-museum.or.jp/>

定価 100円



リレー随筆(34)

競技者表彰委員会委員 浜村 康弘(朝日新聞社)

例えるなら、寺に瓦を寄進するようなものかもしれない。阪神甲子園球場は、リニューアル記念として球場外周床面に名前やメッセージを刻んだレンガを敷設する。2010年春の完成を目指して9月から募集を開始した。東大寺大仏殿など、かつて大修理の際、各地から名前を刻んだ瓦が寄進されたという。愛着のある地に名前を残す。ファンにとって楽しい企画だろう。

「KOSHIEEN NAMING BRICK MEMBERS (甲子園ネーミングブリックメンバーズ)」の会員申し込みをして、刻む文字を登録する。レンガを敷設するのは右翼席裏。先着3万人で、料金は2万100円だ。

揚塩 健治・阪神甲子園球場長は「甲子園は日本の文化遺産だ」と言う。球場は1924年、中等学校野球のために建てられた。当初、甲子園大運動場と呼んだ。室内に体育館やプールが併設され、グラウンドではスキージャンプ大会が開かれたこともある。戦争中に銃弾を打ち込まれた跡が残っている鉄の扉は、ちょっと前まで使われていた。

建て替えも論議されたが、揚塩球場長は改修の道を選んだ。米国の球場を何カ所か見て回り、「歴史と伝統の継承」をうたうことに確信を持った。「甲子園」は高校野球、プロ野球の歴史がいっぱい、詰まっている球場である。

緑のツタに包まれた外観を残すことにもこだわった。全国の高校にツタの苗を送り、育ててもらってから球場に戻す「ツタの里帰り」も進めている。レンガ同様、ツタについても球場と一体感を共有してもら参加型の球場づくりだ。

ツタと並ぶ甲子園名物と言えば、「ジェット風船」だ。16年前、このルーツを調べ、記事にしたことがある。大阪のカーブ応援団の1人に確かめたところ、1978年の春、「何か新しい応援方法はないか」と小道具を探し、大阪の間屋街で見つけたのがジェット風船だったという。

甲子園球場でカーブの選手が活躍したときなどに飛ばした。これが、タイガースの応援にも伝わった。当初は「ゴミになる」ということで、球場内での販売は禁止されていたが、「紙吹雪よりはまし」ということで、1991年から球場内での販売も始まった。

当初は歓迎されぬ存在だったが、色とりどりの風船が夜空に舞い、ラッキーセブンへの期待が盛り上がる。球場に登場してから30年。「甲子園の文化のひとつ」に育ったと言っても、言い過ぎだろうか。

刻印レンガのアイデアを球場に提案した作家の佐山 和夫さんは、記者発表資料として、メッセージを寄せた。「野球場というものは、本来、ノスタルジック(郷愁的)なものだ。まして、甲子園球場となると、多くの人々にとって、それは『母校』のようなものだろう」と書き出している。

野球を愛する者にとって、もう一度、訪れたいところ。改修工事は、そんな甲子園の魅力を、さらに増そうとしている。